

幼 兒 教 育

第 二 十 二 卷 第 四 號

大 正 九 年 四 月 十 五 日 發 行

目 次

兒童保護の問題に關して	湯 原 元 一
神戸園兒の能力調査	望 月 く に
おひなまつりの記	若 き 母
保育のある一日	岡 政
近頃興味を感じた保育の一節	須 子 ト ミ
逝ける園兒の係	日 彰 幼 稚 園
表情遊戯	土 川 五 郎
翫物の教育(二)	久 門 嘉 裕
幼稚園に關する法令抄録	
少年音楽隊(二)	岡 田 美 津

日 本 幼 稚 園 協 會

會 告

○會費御拂ひ込みの節は御名前は初め御入會の時の御名前と御同一になし下され度く、例之ば初め幼稚園名にて御入會、後、個人の御名前にて會費御拂込み等のことなき様必ず願上候整理上甚だ煩雜致し候につき右特に御注意願候

○會費未納は會計整理上甚だ困難致候に付確實に御納付下され度向後萬一御不納久しきに互り候場合は乍遺憾雜誌發送を停止可致候間左様御含み置願候

○會員諸君にて御轉居等の節は至急御一報願上候

○萬一本誌不著等のこと有之候折は直に御一報煩し度候

本誌定價

一冊(郵稅共)金貳拾五錢 六冊 前金壹圓五拾錢
十二冊 前金 參 圓 (郵券代用壹割増)

購讀申込

本誌購讀御希望の方は右定價表により振替貯金にて御拂ひ込み下さい。直に送本致します。(振替口座東京一七二六六番)

大正九年四月十二日 印刷
大正九年四月十五日 發行

東京市日本橋區岩附町一番地 編輯兼發行者 小 高 豐
東京市本鄉區駒込林町百七十二番地 印刷者 柴 山 則 常
東京市本鄉區駒込林町百七十二番地 印刷所 杏 林 舍
東京女子高等師範學校附屬幼稚園內
發行所 日本幼稚園協會

第二十四回日本幼稚園協會總會

一、時 日 四月二十四日(第四土曜日)午後一時半より

二、場 所 東京女子高等師範學校附屬幼稚園にて

一、順序

(一) 會長挨拶

(二) 會務報告

(三) 講演

題 未 定

(四) 會員の談話

(五) 茶菓懇談

餘 興

閉 會

内務省書記官 法學士 田 子 一 民君

四 月

日本幼稚園協會

本誌は最も平易な、最も教育的な子供繪雜誌たるべく苦心して居ります

コドモ

編輯顧問 高島平三郎先生

幼童雜誌 良友

本誌はコドモの兄様姉様に當り、小學生の讀物として最も適當な雜誌です

近來子供雜誌や繪本類が非常に多くなつて、既に二三十種に達してゐる。世の父兄諸氏は、この多くの同種中、はたして何れを子弟の爲に選ばれるよであらうか單に玩具と見做して、その選擇を慢然兒童の取捨に一任して置いてよいであらうか。

發行所 東京市小石川區 東町五十七番地 小石川電話 六一八二 六一八二 六一八二 六一八二

幼 兒 教 育

第二十卷
第四號

大正九年四月十五日發行

兒 童 保 護 問 題 に 關 して

東京女子高等師範學校長 湯 原 元 一

兒童保護と云ふ事は、今日では、社會問題中の重要な事項の一つになつてゐる。孰れ、内務省に社會局が設けられた上は、其事が實際に行はれるであらうと思ふ。而してこの兒童保護といふ事は、申す

までもなく、労働問題と密接な關係があるものである。それが社會問題の一つとして取扱はれる時にはいつも、労働者の生活を安定にするといふ目的をもつてゐる。それで、生活困難のために、兒童の世話が出来ないといふ考へからして、社會的に種々の工夫がおこる。例へば、避妊とか産兒制限(ツワキセデルシステム)(二兒制の如き)といふ様な事が次第に我國にも行はれる様になるといふ事は、人道、ことに國家の上から見ても、誠に憂慮すべき事である。故に、出来る丈け不自然な手段に訴へる事のなき様保護せねばならぬ。それ

故に、この問題は、ひとり、労働者の保護のみならず、ひろく、國家問題、否、むしろ人道擁護の問題である。

歐米における兒童保護といふ問題も、其解決の仕方はいろ／＼ある。其の中でも、獨逸の社會黨、即ちマルクスの系統をひける獨逸の社會黨の如きは、謂ゆる國家社會主義で、一つに、最後の解決を國家の力でつけて行かうといふのである。故に、この社會黨の主張する所によると、労働者の生活を保證するためには、その労働者を妨げる手足纏ひになる兒童は、國家が一定の收容所をもうけて此の世話をなし、のみならず、産褥にあるものゝ如きも、相當の扶助料を與へて、そして安全に分娩せしむるといふ

様にせねばならぬ。更に進んでは、勞働者の子供は、皆、小學校教育以上の時代になつても、必要な場合には、尙、國家が寄宿舎に收容して、一切の世話をする様にならねばならぬといふのである。

しかし、この事が、果してよいかわるいかは、一考を要する事である。元來母親たるものは、自然の教育家である。たとひ、教育上の方法には不案内でも、純然たる沒我的の愛をもつて、子供にのぞむものであるから、兒童に對する注意の周到なる事は、到底、他の、金錢をもつて雇はれたる如き教育家の及ぶところではないのである。母親の、子供に對する眼といふものは、實に鋭いものである。如何なる微細なる點にまでも、及ばざる所はない。謂ゆる子を知るは親にしくはないといふ事は即ちそれで、時としては、過度の愛のために判斷を誤る事なきにしてもあらずであるが、兎に角、無限の愛から促がされて出る注意であるから、その力の強き事は、他に比すべきものゝあらう筈はない。知識技能の點の教育こそ、他の人を煩はさねばならぬかはしれぬが、德育の根本なる、愛の教育といふものは、子供を保護するには最も適任なる母親に過ぐるものはない。他

人はおろか、父親に於ても、母親のこの點には及ぶ事は出来ないのは、世間に實例の多い事である。父に早く別れた人は左程でもないが、母を失つた子供は、成長後の品性に於て少からず缺點を認めるのである。ある先輩の經驗談によると、凡そ世の中で名をなしてゐる人を見ると、母親の手にそだつた人が多い。母親の愛からさへ放れない人は、如何なる境遇に落ちても、人間のやさしみといふものを、常に保存して來てゐるから、それがもとなつて、世の人にも信用され、信愛をうけて、相當に成功してゐるのである。之に反して、父親にわかれた人は、どうも成功者の割合が少ない、といふ事を聞いたが、自分達の經驗によらぬ、この話を裏書する點が多い。この點よりすれば、獨逸の社會黨の主張する様に、勞働者の手足纏てあしひを除くために兒童を、國家が世話するといふ事は、その子の將來のために、又、國民全體の道德的觀念の向上の上から見て、甚だ、好ましからぬ遣りかたである。かくのごとく、親子の人情を無視して、特別な人に一切の子供の養護、教育を初めから委託しやうといふ事は、前に云つた様に、最も自然の教育家たる、母親の教育的價値を捨て、

顧ぬといふ事になるのである。實際、これは、労働者の當面の解決問題としては、已むを得ぬとしても、自然に反した、遣り方であつて、國家永遠の施設として認むべきものではなからうと思ふ。

それよりも、更に一步を進めて、切角、國家の援助を要求する事ならば、他によりよき方法もあらうと思ふ。即ち母親それ自身、労働者それ自身の生活を、適當な方法で安定にする事である。即ち、勞銀を増加して、家庭の生活が安全で、落ちついて産褥にある事も出來、又子供の養育も出來る様に、國家の經費をもつて補つてやる様にすれば、親子の自然の愛を傷けることもなく、又、立派な教育を授ける事も出來るわけであるからして、よろしくこの方法を取るべきである。

それについて、思ひ出される事は、我國における昔の舊藩時代の兒童保護の一斑である。我がこの舊藩時代にも、下層人民の間には、生活上の困難からして、やはり、避妊——かゝる方法は未だ行はれなかつた。——に類した謂ゆる、嬰兒を間引くといふ事が行はれた。これは、子供が生れるとすぐ、襁褓の中を息をどめて殺すものである。ことに、小藩で、

藩主の悪政の結果、人民が苦難を受けて居る所は盛に行はれ、又、饑饉の時などには、平常、藩政のよかつた所でも往々行はれたものである。かゝる弊を防ぐ試みをした藩主もあるので、例へば、かの、日向の缺藩にこの間引きが行はれた時に、その弊を矯めたのは、かの安井息軒の功績であつて、今日では、美談として残つてゐる。また、最近に、茨城地方で發見された事であるが、今迄世に隠れてゐた、岡田寒泉と云ふ人がある。この人は、寛政時代に、舊藩の儒臣として名高かつた人であるが、この人が、茨城の一地方に、代官を任命された。行つて見ると、實に土地の人民の生活が悲惨の極に達してゐた。食ふにもものなく、著るに衣なく、隨つて、謂ゆる間引く事が盛に行はれた。實際これでもせねば一家を維持して行く事が出來ない有様であつた。寒泉は、この土地に代官として來たものゝ實に手の付け様がない、そこで、先づこの風俗を根本的に改めねばならぬと思つたのであるが、唯、言葉で説諭したり、又は法律で嚇したとて效を奏するものではない事を見抜いた。そこで、寒泉は考へた。間引く弊を矯めるには、生活上に補助を與へるにしくはないと、そこで、

この地方の家族が妊娠すると聞くと、その期間中、何程の保護を興へる事、又分娩に際しては、一人に、何程の扶持を興へるといふ事をきめた。つまり、金錢上の補助をもつて、この弊風を打破せんとしたのである。この事が、幸に、效を奏して、成績も大にあり、幾何もなくして、間引く弊もやみ、人口も漸次繁殖をして來た。其他、いろ／＼の奨励事業を起して、ために、この地方は舊にも増して、人民がよく生を安んずる様になつた。これは從來世間にあまり聞えて居なかつたが、十年ばかり前に、ある地方で、埋れてゐた石碑を發掘した所が、その石に「岡田大明神」と刻んである、不思議に思つて調べると、なほも、諸所から、同じ文句を刻んだ石碑が出て來た。そこで調査によつて岡田寒泉氏がこの地方に代官の折に上述の様な事績があつて、土地の人民が感謝の念の現はれとして、恩に報いたい心から、誰がすゝめたのでもなく、全く自らすゝんでかゝる石碑をたてたのであるといふ事が解つた。其の詳細は、重田定一といふ人の調べたる「岡田寒泉傳」といふのによればわかる。のみならず、自分も嘗つて水戸に行つた時に、この事を、親しく發見した粟田完先生

の養子の人について詳しく聞いた事がある。かゝる事は、實際には、岡田寒泉氏のみならず、舊藩時代の、この間引くの弊をのぞくための救濟事業はこの趣きによつてなしたものが他にもあると思ふ、現代の人はかゝる事は、温情主義であるとして反對するかもしれないが、出來得べくば、この方法がよいと思ふ。無理に子供を國家の手に引きあげて、不自然な取扱ひをするよりも、生活困難の家族其ものをして、その困難から免れしめるといふ様にすれば、何れの社會も、母子の人情には變りはないのであるから、喜んで子供を教育して、其成長を樂しむ様になるに相違ない。

歐洲の勞働者の様に、自己の生存權をふり廻して、自然に育つべき自分の子を、國家の冷たい手に渡し、其教育の責任を國家に負はせやうといふ事は、誠に不自然で、正義人道に反したやりかたであると思ふ。

將來、我國にも社會局でも起るとすれば、單に、西洋の方法のみならずして、日本古來のやりかた——それは古くとも最も廣い意味での道德的な方法——で、しかも效果の適面に見える方法のある事も考へて、よろしく之を參考して、施設をあやまらぬ様にせねばなるまい。(談話——文責在記者)

園児の能力調査

幼稚園長 望 月 ク 二

大正八年四月一日麗かな春の日の影を浴びて五歳と六歳になる百餘のいたいけな稚な兒は親達に手を引かれて神戸幼稚園に参りました。これは社會的生活の初陣なのであどけない顔にも緊張の色が見え他所行きの態度でかしまつてゐる姿は實に可愛らしいものでありました。一日二日と過ぎ行くうちに、漸次親の手を離れ附添人を返し、一週日の後には自然に獨立の生活をなしそろ／＼惡戯(自己活動)が始まりました。先生との間柄友達との交際の親密さが日一日と濃厚になつて参ります。雀の様な小さな口からはいろ／＼のお話が絶えず飛び出して参ります。幼稚園では此の機會を失はぬ様に幼稚園教育を餘り多く受けない先に兒童の一人／＼の能力の検査を致します。検査は身體を始め心の方面即ち智力能力性質を調べるのでありまして、固より完全を期する事は出来ませんが、一家庭と違ひ多數の兒童を集めてゐるので比較研究をするには最も好都合であります。人は各々異つた天性を持つて生れるもので、

生れた瞬間から五箇年間の家庭生活に夫々順應し、接觸する事物の影響のため全く個々の發達をして居りますが、此發達こそ將來益々發展すべき人類の大切な要素であると思はれます。斯くの如く一人／＼の顔が異なる如く、各個性は異つてゐますが「極めて勝れた」「極めて劣つた」といふ兩極は、割合に少數で大多數は殆んど同じ位に發達し其間共通點を見出す事が出来ます。此の大多數の發達を標準として、總ての教育は行はれて行くのでありまして、昨年四月この新しい愛らしい兒童を預つた私共は「悉くの兒童をして普通の標準以下に位する幼兒の無いやうに努ませう」と、決心を定めまして、私共の最も重い任務であるを考へて居ります兒童の能力の検査を致しました。兒童の身體と精神とは頗る密接なる關係を有して有りますので、之を離して考へることは出来ませんが、今茲には精神上のこのみについて申し上げることゝ致しまして、二三の調査を左に摘出して見たいと思ひます。

一、直接ノ記憶

四月の中旬頃やうく馴れて話をなし得るやうになつた新入の兒童を、一人く私の膝元に呼び寄せ、優しい態度で「私の云ふた通りを云ふて下さい」と左の問題を與へてたづねました。

(い) 數の反復。

二語一秒の早さにて次の數字を讀み之を反復せしむ。

(一) 三六八一

(二) 五一九四二

(三) 七二四五三六

其の調査の結果は次の表の如くである。

數の反復

調査人員	五年		六年	
	男	女	男	女
第一問ヲ答ヘタルモノ	二七	二四	二九	五八
第二問ヲ答ヘタルモノ	七〇%	七一%	八〇	七八
第三問ヲ答ヘタルモノ	二六	三三	四七	四三
完全ニ答ヘタルモノ	一七	四八	一九	一九
	一	二	一	一〇

全ク答ヘ得ヌモノ	八	五	一一	一二
一題ニテモ答ヘタルモノ	一八	一七	三七	三六

此の調査に依つて見れば第一問を答へ得ざる者は劣等者で第三問迄完全に答へ得た者は優等者であります。私は此の劣等者について考へました。これは記憶が悪いのか、發表が出来ないのか、又は恥しいのも少しは加つて居りますことせう。此の數の反復は、所謂鸚鵡返しで意味のないことこの記憶であります。次は。

(ろ) 綴字の反復

これは意味ある事の記憶でありまして、左の言葉徐徐に明確に話して反復させました方法は、前の通りであります。

(一) 兄さんが出て行つた。

(二) きのおは、おもしろいお話を聞きました。

(三) おかしをあんまりたべるとおなか、痛くなりませう。

其の調査の結果は次の表の様であります。

綴字の反復

調査人員	五 年 齡		六 年 齡	
	男	女	男	女
第一問ヲ答ヘタルモノ	二二三	二〇〇	五九	五九
第二問ヲ答ヘタルモノ	六一	六七	八一	九三
第三問ヲ答ヘタルモノ	五七	五〇	七六	七五
完全ニ答ヘタルモノ	一二	一二	四三	四三
全ク答ヘザルモノ	〇	〇	二	〇
一題ニテモ答ヘタルモノ	一一	一四	一六	一五

此の調査に依りますと、第一問を答へ得ない者は最も劣つた者で年齢男女に對する差別があまりない様に考へられます。即ち意味ある簡單なる言葉は、モット前の三歳四歳に於て發達するものと思はれます。此の劣つた者こそ保母の最も努力を要するのであります。

(は) 談話の理解發表

これは次の様なお話を話して聞かせ、それを理解して再び話し得るかを試みたのであります。

二人の子供を兩方から膝の上に抱き、内證話をす

るからよく聞いてあちらの先生にも話してあげて下さいと云ふと、子供はうれしそうに耳を澄して聞いて居ます、そのお話は次の様なものでございます。

『ある處に太郎と云ふ子がありました。其の子供がお友達とお二階で遊んで居りましたが、どうしたのかお二階の梯子段からコロ／＼／＼ところがり落ちて頭に大きなコブが出来ました。(コ、デ子供ハ皆ニコット笑フ) 仕方がないから病院へ行つてお醫者様に診ていたゞきました』。

他方に居る二人の先生は、一人／＼子供の話をお話を聞いて之を左の五段に分ち記憶發表の良否を記載致して見ました。

- (一) 太郎と云ふ子供のあつたこと。
 - (二) お友達とお二階で遊んだこと。
 - (三) 梯子段から落ちたこと。
 - (四) 頭にこぶが出来たこと。
 - (五) 病院で醫者に診て貰つたこと。
- 其成績は左の通りであります。

話の理解及び發表

調 査 人 員	五 年 齢		六 年 齢	
	男	女	男	女
第一ヲ話シ得タモノ	二六	二六	五八	五八
第二ヲ話シ得タモノ	五四%	五四	六二	五九
第三ヲ話シ得タモノ	一九	三一	五〇	六七
第四ヲ話シ得タモノ	五四	三八	七二	八四
第五ヲ話シ得タモノ	四二	三五	六七	六七
完全ニ答ヘタルモノ	五〇	三五	六二	六〇
全ク答ヘザリシモノ	三	一	一五	一八
少シニテモ答ヘタルモノ	一七	一四	三三	三二

善良なる條件の下に置かれた満四年の幼児は、日常必須の言語の形式(音聲)を習得し、其の使用に、略、熟達すといふことは、松本、檜崎兩先生著の「教育的心理學」に記されてある通りであるとすれば、五歳六歳の幼児は、これが完成期に進みつゝあるので、言語の教育の最も大切なる時であります。然るに右の調査に依つて、此の簡單なる話の理解發表が全く不可能である児童があるとすれば、保姆の努力はま

た此の點に向はねばなりません。

斯くて四月より十一月に至る八箇月間、花を尋ね鳥を追ふて諏訪山上、藤の花垂れ池に纏おどる我が園の庭、往來じげき郊外保育の道、如何なる場合にも秀れる子を忘れず、種々の談話を試み導き稻の刈入れ時なる秋になつて再び前と同じ問題につき、四月の検査の時に劣つてゐた者のみを調べて見ました其の結果は左表の通りであります。

年 齢	調 査 人 員				
	反 數	綴 字 ノ 復	話 ノ 發	理 解	表 解
五年	一一	一〇〇% 二	一	二	三
六年	一八	一〇〇% 五	一	二	三
五年	一一	一〇〇% 五	一	二	三
六年	一八	一〇〇% 五	一	二	三
五年	一一	一〇〇% 五	一	二	三
六年	一八	一〇〇% 五	一	二	三

(答へ得たる人員は凡て(百分比)を以て表はす)。

(一)數の反復に於ける第三問に、むづかしと見へて答へ得る者なきも第一、第二の二問は普通の標準まで達した。

(二)兒童の記憶は無意味の綴字ならば第一の數の反復の如く六字を記憶再生すること頗る困難なるも右意味にして殊に幼児の經驗と合し興味あることは記憶し易し。第二の綴字の反復の良好の成績をあげたるも其の譯であるが、唯一人の男兒は遂に言はなかつた。

(三)話の理解發表も、亦成績良好にして保姆は満足したるも、前記の男兒はこれも遂に一言も答へなかつた。この一人の爲めにこれよりは最善の方法と努力を爲さればならぬ

(以下次號)

おひなまつりの記

東京市四谷幼稚園

大正九年三月二日午後一時より年中行事の一つなるお雛祭りをいたしました。

幼児一同、いつもより少し早くおべんとうをすませて、時間の来るのを待つております。遊戯室の正面には、幔幕をはり、舞臺をこしらへ、お細工のお雛さまを飾つて、準備はととのひました。定刻になりますと、幼児は、みな、にこ／＼として遊戯室に集まり、お行儀よく餘興の始まるのを待つてをります。お招きいたしました母君姉君方も、椅子におつきになりました。

區長様は、如何遊ばしたかとお待いたしてをりますと、區長様は、お客様が有て少し遅くなるこの事を園長先生よりお断りになりました。何分にも活動性に富む幼児のごとて、待遠しくなり、あちらこちらに、ソロ／＼お話がはじまるので、園長先生より餘興の番組の中にあるお母様のお断をくり上て今お話ししていたきませうとのお言葉に佐久間保母は、例の優しき愛らしき聲にて、「己れの分を守れ」どの

お断を、おひな様に例へていと面白くお話なさいましたので、幼児もしばらくはお話の中にあつて静かでしたが、それがすむと又ガヤ／＼はじまる。早く區長様のおいであればよいと氣をもむうち、漸くお見えになつたので、みんな静まりかへる。此日の主人役酒井きん子嬢は愛らしき口ぶりにて、「けふは私たちのお雛まつりですから皆さんと面白いことをして遊びませう佐久間先生にお母様になつていただきます」と述べ、佐久間保母お母様となり、出演幼兒はお客様となつて、大勢つれだつて「花子さん」とよびにくる。

花子「ハイ、能く入らして下さいました。サア、どうぞこちらへ」と、お母様共々の接待振り、まことにお上手でした。「みなさんおそろひになりましたから、御一所にお雛さまの歌を唱ひませう」とのお母様のお言葉に、全員にて歌ふ。夫よりは、お母様のお名指に依り、かわる／＼舞臺に上りて、お得意の遊戯や唱歌をいたしました。

まづ第一番は、松の組(年長兒)の女四人、めい／＼人形をだいて人形の歌を上手に唱ひました。第二番は、梅の組(年少兒)の男の獨唱(桃の中から)之も極めて上出来でした。次は梅の女の、はとぼつぼの遊戯、松の男の三人唱(進軍)、松と竹の女の對唱(小さい子)、松の女の遊戯(おどれ)、竹の女の遊戯、竹の男の獨唱など、唱歌は勇ましく又優美に、遊戯は活潑に面白く、プログラム進みゆき、大黒サマト白兎の對話遊戯となる。最初に、長いお耳の兎さんが出て来て、舞臺の左方にすわり泣てゐる。ところへ、大きな袋を肩にかけて大黒サマが出て来て、對話があり、大黒サマガ退場すると、兎さんは正面になり、歌(獨唱)大黒サマのいふとほりの一節を唱ふる間、兎は動作遊戯を爲し、歌終り挨拶して引下る。此一場中々能く出来たれど、對話の聲が少し低かつたので、後の人には聞えなかつた事であらふと、をしき心地致しました。獨唱はよく出来ました。次に梅の畔上義太郎君(五歳)が、お福面をかぶつて、全員が唱ふる「今日はどうれしいひなまつり」の歌に合せ、手ぶり足拍子面白く踊るさまの愛らしきに、區長様始め母君姉君方もお腹を抱へ拍手喝采しばらく

は鳴も止まず、當日第一等の出来でした。お客様になつた幼兒のお禮についで、主人役の花子さんがおしまひの挨拶をして、愉快に賑はしく餘興終る。區長様が、幼兒にわかり易い簡單なる訓話を遊ばしてお歸りになる。

幼兒はお待かねのお豆いりを頂き、大にこ／＼に嬉しうに、ほをばる。その無邪氣さ實に何ともたどへやうもない愛らしき様子に、自分達もみなつりこまれて心からにこ／＼しました。おみやげには、お細工のお雛さまを頂き、嬉々として元氣よく歸りました。母君姉君方は、お雛様の飾りある梅の室にて、園長先生と親しく懇談遊ばされ、悦びにみちた幼き人の手をひきおかへりになる。あゝ桃の蕾にも似たる愛らしき幼女達よ、やがて美しき花咲き實を結びかぎりなきまで榮えよかし。行末長く幸あれかしと祈りつゝ、今日の感想をつりました。

(四谷幼稚園の若き母誌)

保育の或る一日

岡山女子師範附屬幼稚園

岡

政

保育は幼児の生活を満足せしめ、また適當に之れを指導して行くべきでありますから、學校教育の如く、毎日一律に保育事項を定め方案を立てる譯には行きませぬ。日に月に發達し、心機の轉換また著しき幼児に對する保育の方法は、決して固定的のものでなく、日々新たな觀察と考慮のもとに保育の目的を達すべく、時々立案せられなければなりません。夫れ故茲に述べる保育の一日もたい實際の一端を示すに過ぎませぬが、これによつて幾分にも、當園保育の方針を御了察下さるならば此上なき本懐と存じます。幸、過般大阪市大寶幼稚園の尾崎保母突然御來園、保育狀況を親しく御覽下され色々御批評をも願つたのでありますから、特に其日を選び日誌を其儘記述して、大方諸賢の御高評と御教示とを仰ぎ度と考へます次第であります。

(幼兒數七十五保母二)

登園尾崎様と保育上の意見を交換する内に時は九

時半となつた、狭き室内乍ら幼兒の遊ぶ聲が一向に聞えぬ、大多數は庭に出て居たのであつた、それから尾崎様と何かと話しながら庭に行つて見ると何となく幼兒が平素とは數少なく見えたのでよく見ると、十數名は藤柵の下で一つの團體となつて飯事に熱中の有様で、掃除をする者があるかと思へば子守姿の兒もあり又料理に餘念もない兒もありであつた、其あたりには時節柄石蹴遊の群が幾組もあつた、自ら定まれる自己の番の來るのを待つて居る、其他三十名許は庭の彼方の十六坪許の砂場で何事か頻りと忙はしさうにやつてゐる、其場に行つた自分は幼兒の身丈よりも高い四個の砂山の出來て居るのを見て驚かすには居られなかつたのである、そして賢顔に其高低を批評した所「先生此の山は皆一つしよです共同で砂場公園を作るのです」と年長兒の説明に今更大赤面、そして子供等は各々の山に名を附けて、大山、オ宮山、幼稚園山、赤チャン山等と稱へて居た、幼兒相當の判斷をなして寧想像の中にも論理の

見解を加へて居るよと思つた、活動には差があつて男兒は主として山を築き女兒は主として畑を作つて居た、自ら性狀によつて分業的でしかも大團體となり個人としても共同としても一生懸命に働いて居る状態を見實にこれ丈は日頃の方針になつて居て誠に心持よく感ぜられた、此時他の一名の保母は十名許の幼兒と室内で昨日より引續きの萬國国旗カルタの製作中で全く庭の賑はしさを他所にして頗る眞面目にしかも非常に興味もて「出来てかはいたらいつしよにして持つて遊ばう」等と語り乍らなして居た、丁度其時奥の室で唱歌の聲がしたので若しやと行つて見ると、果して樂器好きの一女兒が數名の女兒と共に唱歌中であつた、自分の姿を見るや「先生ひいて下さい」と頻りにねだる願ひのまゝにする内何所からともなく十名許の幼兒がよつて來た、此時は最早砂場公園もカルタ製作も出來上り頃で適當の時と思ひ自分はあたりの幼兒にハンカチ取遊をなさん事を告げた、するど例によつて友から友に賛成を求めたものか、喜び飛び來た者何れも「よせて下さい」と自分の材料提出は大々の歓迎をうけ遂に全園兒殘らず集つて仕舞つた、遊戯はあれよこれよと相互提

出で種々重ねてなし面白くてついで一時間餘も續けた、群集中にある幼兒の心は興奮其高潮に達したのか、失禮にも尾崎様へ對し遊戯の仲間入をさへ願ふ者も出來た、其の内食事の準備をして居た幼兒が時を知らせて來たので驚き見ると正午眞近くなつて居たのである、吾等相互はあまりに面白くて遊び過した等物語り乍食堂に入つたのである、折柄窓側はクローバーの連鎖をもつて飾つてあつた、是れは三幼兒が庭の雜草中のクローバーを採取して作つたものを裝飾の意味で吊して居たのであつたが色の關係で人目にたゞぬのであつた。

誠にかゝる場合其外形よりも其心情其熱心の程度に於いて又と得難き其行爲を幼兒より訴ふる迄心附かなかつたは自分とてあまりに沒常識の極であつたとつくづく後悔の外なかつたのである、そして一日の内最も樂しとする食事の團樂は約三十分で了へ引續別室で食後談話に腹鼓打つて以後は全く自發活動となし特筆すべき程の事もなくて平々凡々裡にいつしか退園時一時半が來たのであつた。

終

近頃興味を感じた保育の一節

福島市立福島幼稚園

須子 トミ

本年一月の末の頃、内務省衛生局で印刷した流行感冒傳染の有様の畫を見せて、「人の前で咳せきをするときは、口に手を當て、わきを向ひてなさい。咳からうつたり人にうつらしたりするのですから」と申聞せられたれば、各兒、咳の出るときには、口に愛らしき手を當て、なすやうになつた。中に手をあてずにするものあるときは、「あれ、達ちやんは、お手を口にあてないでして居るよ」などと、おめるものも出來た。その中に「先生、マスクをかけるとおて、をあてないで咳をしてもよいのね」と申すものも出來た。「ほんとうにそうですね。マスクをかければよいですね」と申せば「先生、私マスクあるよ」と、一人申せば、私もある、私もある、と人にまける事をきらひな子供の事として、そこに集つて居る者が皆マスク持ちになつてしまつた。それで其翌朝はマスクをかけて來たものが多數あつて、これ見よがしにとつたりかけたりして見せて居る。又、翌日になると一層にマスク、使用者が多くなつた。かけぬ者はうらやましさうに見

て居る。二三日たつうちに、園内はマスクの世界になつたやうだ。然しながら、性來子供はまがなすきがな喋舌らずには居られない。草木を合手にして迄喋舌つて居る。しやべる事がなければ、歌をうたふ。歌を知らねば、自作の歌をつきする事なく歌つて居る。歌ひあきれば、わけもなく大聲を出す。一時も黙して居られぬは、幼兒自然の本能である。してみれば、如何にマスクが、幼兒にとつて不便であるか、又、苦しい事であるか、一時間はおるか、三十分もかけつゝけて居ることが出來ないのである。處で、子供は忽ちにかけたマスクは、あごをさへとなり、時には、目にかけて、めくら鬼事遊びを爲すものさへあつてマスクも一つの玩具になつてしまつた。無理もない事である。そこで、私は、幼兒に向つてマスクを獎勵する事は出來なかつた。子供は、園内でマスクの咄とマスクを遊戯の道具にして居る所より、幼兒の慾求を満足せしむる爲めに、明日の保育材料に、折紙にもマスクの製作を試みんものと、色々工夫せ

しも、なか／＼幼児の歓迎を受けられやうもない。それで、幼児自身に工夫させるも又面白かるべしと、幼児の前に紙と鋏を配布した。幼児等は、各、紙を切りはじめた。四角に切るものもあれば、長方形に切るもあり、初めからマスク形に切つてしまつて困つてるものもあつた。しばしは自發的の仕事なれば、幼児の全精神はマスクに集注され驚くばかりの注意が拂はれた。中に一人の女兒が、「先生出来ました」と、自分の鼻にあて、先生の前に來た。どれどんなに出来ましたかと手に取り見ればこは如何に、眞のマスクと少しも異ひがない。私も感心して、自分が前に工夫して幼児に示さんとしてよい工夫の出でざるに、今此幼児の工夫せしにはいたく驚かされた。今、幼児の工夫せしマスクは長方形の紙を殆んど四角に二つに折り、輪の方を上にして、かぶとをたむむと同じやうに兩端を折りふちをつくり、横につぶして、裏表重ねたまゝ、狐面のやうになす。

他は餘り類似のものもなかつた。そこで幼児一同に「百合ちゃんのことしらへた。マスクをご覧なさいよ。出来ましたね、之を皆さんでつくりませう」と之れを手本にして、こしらへた。むづかしくなくつて眞

のマスクが出来たから、皆から大歓迎、百合ちゃんは大満足、次から次と此マスクの製作で、忽ち園内紙マスクの大流行。糸をつけてかくるもあり、先生糸を付けて下さいと持ち來るものもあり、いつしか此紙マスクが遠く廣まつて、小學校の小供までがつかくるやうになつた。處で、本マスクは蔭も形もなくなつて、紙マスク全盛となつてしまつた。こんどは、紙マスクをつくる事が盛んになつて、此處彼處に集りて、マスクの折紙に面白がり、之れを澤山造りて、マスク商ひ遊びを始めた。賣るもの買ふものなかくの賑やかさ。かくして遊びはどこまでもつくる事がなかつた。

○日本幼稚園協會總會

本會第二十四回總會は別項の通り來る四月二十四日(第四土曜日)午後一時半より東京女子高等師範學校附屬幼稚園に於て開催の筈。何卒多數お誘ひ合せて御來會下さる様にお勧めします。

わが園の日記

京都日彰幼稚園

逝ける園児の佛

我がいとしい／＼Kさんはなせ死んだのだらう。もう、永久に／＼歸らないのだと、一日に一度や二度は必ず其の佛が思ひ浮ばぬ日はないのだ。戸棚の中に多くの園児のものと共に、積み重ねた成績物のうちには、彼のいぢらしいKさんの思ひ出もあり、樂みのあとも残つて居る。出し入れの時には、きつとそれが目にふれる。其の度に胸をつかれるせつなの涙は、いつまでも忘れることの出来ぬものである。夫婦の中にたつた一つづ種の男の子であつた。わけて母親は此の子を何物にも更へ難い玉ども、寶ども思つて、我身をかまふいとまも惜しく、愛でいつくしんだ。傍から見では餘りに親ばかとも見ゆる位に。それで、子供は實に獨兒のためしにもれず、優柔不斷の甘へ子だつた。幼稚園に入つてからも、中々友となれず、保母となじまず、母親の傍を少しもはなれぬ。一週間経つても、十日たつても、同じであつた。種々と、すかしもし、なだめもして、母の手から受取らうとする、けれども、母の後にしがみつき、物おちの目附でぢつと見つめてゐるのであつた。來年からは、學校へ登らねばならぬのだから、これでは其の時になつて困るといふ親御の思ひで、何とかして手ばなす工夫をめぐらしたいのであつた。可愛ければこそ、いたい目も見せたのだらう。今日は、門迄で送つてくれたら、一人で幼稚園に居ると云ひだしたとて、母親は、いそ／＼と送りて來る。門迄で來て別れようとする、中迄で來てくれと、手拭を引張るから、そんなら「今日だけだよ」と云つて中迄でつれて來る。だが友達や保母などを見ると、また、其の勇氣もくぢけてしまい、母の後にかくれてはなれぬ。若い母親は精も根もつきはて、泣かぬばかりに困つて居られた。其れを見ては、氣の毒でたまらず、

何もためしだと思つて、無理に母の手からもぎ取つて、母を歸し、泣く子を抱いてつれ行き、種々氣に入らさうな言葉を並べたり、繪本をひろげて話かけたりした。一時は、煙にまかれて泣き止むが、又、思ひ出しては、しくしくとペンをかく。いぢらしくもあり、あきれもした。母は、歸るにも氣にかゝるものと見えて、窓の外にたゞずんで、中の様子をうかがつて居る。子供も母を尋ねて窓の外を見るのであつた。もし、母が見附けられたらおしまい、子供は泣きさけぶ。かうした日が十數日も續いてゐた。其の間に幾分あきらめたものか、父母の心念が通つたものか、遂には一人で来るやうになつたのも不思議であつた。雨の日や道の悪い時の他は、一人で来るやうになつた。けれども餘り口をひらかなかつた。手を取つて連れ立つて居ても、知らぬまにすりぬけて隅の方へいつてじつとこちらを見つめて居る。「Kさんは？」と云つて尋ねて見ると、目をそらしてふつとあらぬ方を見る。かうした子供であつた。母親そっくりの色の白い、血色のいゝ女にせまほし程の愛くるしい子であつた。それで、いつもニコ／＼としてゐた。「先生これ」と描方などの時には得意になつて見せつける様にもなつてゐた。軍艦や飛行機が得意であつたが餘り巧みではなかつた。しかし、利口な性だつた。けれどもいたいけ盛りの子供にくらべては、いと、因循な方であつた。しかしとにかく私にとつて印象の深いことは例のない位である。

年々に流行する病も、世が進むにつれて劇しくなり行き、津々浦々のはてまでも、病魔におそはれない、所はなく、人心恟々として戦いてゐる實に此年の流感にて、悲惨極まる物語もいと多いことは、日々の新聞の報ずる所である。それがため學校や幼稚園等は、すべて休業の止むなきことになつて相前後して何れも閉鎖した。我が園も十七日閉鎖した。此の長い休みの間には、随分心を冷した事實も聞知した。どうか我が身邊にかゝるいたましい事實がなければよいがと思つてゐたが、あゝ遂にかうした悲惨事を私も經驗せねばならなかつた。丁度休みもすみ、明日の三日からは出勤すると云ふ前々日あたりから、どんなにそれが待たれた事だらう。其の日となつた。氣も心もそゝる浮き立つ思ひで勇んで出勤した。兒供達も同じ心であつたのだ。姿を見るやとんで来て「お早う／＼」「先生御機嫌よう」の聲をあびせかけられて、身邊にまつはる。足のふみ

どもない位。皆いき／＼としてよろこびの光にかゝやいてゐる。あゝ美しい愛らしい子等よいつもより多く幸福が感ぜられた。保母室に入つて何氣なく机上にのせられた届書をとり上げて読んで見た。と、私は自分で自分の目をうたがつた。唯だ今のさきの喜びに満ちた晴れ／＼しい心も、たちまち、黒い／＼雲にとざされた。「あ、あのKさん」が……何度讀んでも幾度讀み返しても事實であるから仕方がない。あゝこゝにも無情の嵐は吹いたのだ。まだ／＼かたい／＼つぼみの花を、無慘にももぎ取つたのだ。あゝ可愛いさうだ／＼と、ひとり袖をしぼつて居つた。そこへ小使が来て「ほんとにKさんの御家は御氣の毒な事でした。お子さんばかりでなく、母御さんも死なれました」。そのこと。聞くに堪へない悲しみではないか。神も佛もない人の世かと、涙も出ない程いたましく思つた。其の日、私は主任と共に、其の家へ悔みに行つたのだつた。表戸を明けるや、家中は悲しみにとざ／＼れて居ることが明らかであつた。老母の方とKさんの父親と、たつた二人きりであつた。彼等の悔がどんなに悲痛な感じであつたかと云ふことは、深い／＼經驗をもつて居る私にはよく察せられた。思ふやうに悔の言葉が出なかつた。父親は一言も語らなかつた。皆、老母の口から聞くのであつた。佛前に導かれた。二つの新しい大小の位牌は立ち上る香煙につゝまれて、安らかに永き眠を語つてゐる。水を手向け、香をたいて、ふし拜む。知らず、涙は止め度なく流れる。他人の上とは思はれなかつた。今しがた、父親は、数々の玩具を取り出して、ありし昔の愛兒の持ちなしたかたみを見て涙にくれてゐたのであつた。せめては、それも心やりの一つなのであらう。父親は、さすがに男だけに涙は見せないが、其の悲しみを堪へ／＼て涙をのんで居ることは、よく察せらるゝのである。最愛の妻や子供を一時に失なつたのだもの氣の狂はぬのが不思議な位だ。眼の底には、此の運命を呪ひ呪ふそのかげは、語らずとも相知れてゐる。ほんとうに何と言つてなぐさめん言葉も見出すことは出来なかつた。老母の方の靜かに語らるゝを聞いては、實に斷腸の思ひがした。子供が三四日先きに牀に就いたので、母親は寢食も打ち忘れ身も心もささげつくして我子の看護に腐心した、子供の病勢は其の甲斐もなく肺炎とまで進んだ。母親は、狂せんばかりに悲んだ。遂にかうした中に、病氣は母親に感染してしまつた。

母親の病氣は、一層劇烈であつた、二日ほどで危篤となつた。隣合つた室に、母と子が、病に苦んでゐる。母は子を呼び、子は母を慕ひ求むる様は、實に――悲惨で目もあてられぬ様だつたこのこと、あゝ遂に――母は我が子を殘して永眠した。子供も、一日おいて、母の後を追うた。子は母の死を知らず、母は子の死を見ずに、永く眠に就いてしまつた。定めしよみちにいつて、再び手を取り合つて長い――旅路をゆくことであらう。運命の神様は此親子のものに對してつれなかつたのであらうか。又は、すくはれたのであらうか。神でない限りはわからぬのである。「神様よねがはくば此のあはれ縁深き母と子を、安けき道に導かせ給ひ、永久に――愛でいつくしみ給へ」と祈らずには居られなかつた。

○感激の一しづく

實習科卒業生 え い 子

師の君より、宮中拜觀の光榮に浴すべければとの仰せ承りてより、たゞ心おどり、もう一日よ、二日よと、おまなこの正月待つ心地にもまして、待ちわびぬ。白襟に紋付よなど、より――にしひやかに語らふも女らしくもやさしくおさへきれぬ喜びのあふれとも覺ゆ。

三月二十五日。あゝこの世にあらん限りの思ひとなりしこの日。朝の程よりあやしき空のやがて降り出したるは口惜し。本校、實習科、専攻科、委託生の順にならびて、うれしさにさわきたかまる胸おしづめて校門を出ては八時十分。九時過ぐる頃御所につきぬ。

しばぶきの聲一つさえたてず、たゞサクリ――と靴の音のみ耳たちて、これなかりせばと思はるゝ迄の静けさ。呼吸くるしさに我にかへれば、何時のほどよいか息をもつかずにおそれかしくみて歩きしにて、之を幾度か繰返しつ。

玉座の御邊り拜し奉りては、たゞ――身のわな――を覺えつ。やんごとなき御方様の、あの内苑門の御内こそ常の御まじどころと承りてはたゞ頭さがりてはるかに拜しあげつ。

玉芽の道如何にたどりしや、つゆ知らぬまに紅葉山に身ははこばれぬ。

しるしつらぬるにはあまりに壯嚴なりしよ。たゞ――、何らやらも遠き日の夢ごとの程にて、うれしきは胸にたゞよひ夢の中に夢見る心地すれど、この光榮はげに夢にはあらざりし。

ときはなる松の緑のいやふかく

君を千歳と田鶴のまふなる

表 情 遊 戯

土 川 五 郎

○ 牛 若 丸

圓形を作り圓心に向く。

京の 兩手を體前(胸の上部の邊)に持來り直ちに
左右兩側下に開く。

五條の 下げたる兩手の上膊を兩側より上に掌を
向き合せ肩の高さに上ぐ。

橋の上 兩手を腰に足踏三回。

大の 右手にて薙刀を小脇にかひ込む如くす。

男の 左手の拳を握りて張る。

辨慶が 左足をやゝ左へ次に右足を右へ開き幼兒
は辨慶となりすます。

長い 左手にて右にかひ込める薙刀の柄を握る
(右手にて持てる所より更に前方を握る)。

なぎなた 右手を以て更に(左手にて握りたる所
より先きの所)左手の前を握る。

ふり上げて 薙刀を右上に振り上ぐ。

牛若めがけて 左足より踏出て前へ三步上體を稍

右向きにす。

切りかゝる 右上より左下へ薙刀を振り下ぐ。

牛若丸は 四歩後退す。

飛びのいて 一回跳躍す。

持った扇を 右手を右後方より(扇を持てる如く
して)右上にあぐ。

投げつけて 扇を投ぐる様をなす。

こいこいこいこらんかんの 右手にて招く如く
す。

上へ 右足を右へ一步すると同時に兩手を左右に
開く(掌を下に)。

あがつて 左足を右足につくると同時に兩手を下
ぐ。

手をたゝく 拍手三回。

前や 左足一步前に上體をやゝ前に傾けて右食指
にて前下方を指す。

うしろや 兩かゝとをあげ兩つま先にて右回轉して後ろを向き後下方を指す。

右 前に向くと同時に右下方を指す。

左 左足を引き右足をそろへ右食指にて左下方を指す。

こゝと思へば 左へ一步同時に左下を指す。

又あちら 右へ一步同時に右下を指す。

つはめの様な 兩手を開き羽ばたきしつゝ一回轉

翫物の教育(二)

現今の教育は、國家も教師も研究には些の遺漏なく、又、あらゆる努力をして居るのであるが、實際の成績はとすると、それに報ふるには餘りに貧弱である。而して、若しも教育が、此方向其まゝでは、幾ら進んでも、幾ら足掻いても、彼岸を見ることは到底出来ないやうな氣がする。そして現在の形式法はもう行詰りである。外面法より内面法に移らなければならぬ破目に陥つてゐるのである。即ち我、大

す。

早業に 兩手を拱ぬきて蹲踞し頭を左へ傾け右上を見る。

鬼の辨慶 直立し兩拳を握り體の兩側より少しく離して張る。

あやまつた 兩手を少し前へ上體を屈して再び正位に復す。

大日本翫物教育協會

久門 嘉裕

日本翫物教育協會は、翫物による、内面的、外面的徹底法の宣傳を使命とするのである。けれども、何も新説でも獨創でもなく、又面倒臭いむづかしい、言ふは易く行ふは難しといふやうなものでない。要は讀んで字の如く、翫物で教育しようといふのである。從來とても、學校に於ても、翫具は盛に用ひられて居るのであるが、其取扱は子供の翫物本能とは、全くかけはなれて、堅苦しい教具といふ資格になつ

て、子供の親しみからは遙かに遠かつてしまつてゐるのである。家庭に於ては、玩具は、唯、子供を喜ばせるものだといふ考へだけである。随つて、現在に於ては、教育的効果よりは、害の方が大きくなつてゐる。幼稚園は、元來玩具教育の本場だけに、玩具の教育といふ意味は強いのであるが、一般玩具からは採用の出来るものは一つもない。先づ頼りにするものは、フレイベル氏の所謂恩物が主で、それに近頃のモンテッソーリ式の道具が用ひられてゐる位で、玩具教育の本場としては甚だ貧弱なものである。それに、遺憾ながらフレイベル式も、モンテッソーリ式も、未だ、玩具に對する眞の諒解がない。恐らく理屈が先きに走つて、實際が後に遅れてゐるの感がある。即ち、大人の頭で子供に強いる教具になつて、動もすれば、形式的に流れ、所謂小學校の教科書と同性質のものになつて、遂に折角の玩具も子供の玩具的本能とは離れてしまつてゐるのである。其よい例證として述べんに、試に多くの幼稚園を參觀したときに、これはよい方法であると感じる實際法は、必ずフレイベル方法でもモンテッソーリ法でも、又傳習所法でもない。毎日の實際からの要求に

對し、其先生の獨特の工夫から出た、實に、切れば血のほとぼしるやうな、活々した方法である。即ち子供の玩具的本能に共鳴したる眞の保育法であるからである。

(未完)

○ぬきがき

文部統計摘要(大正九年一月刊行)の内から
(大正八年三月末日における幼稚園に関する統計)

公 立 幼 稚 園

種 別	公 立	私 立	總 計
園 數	247	428	675
保 姆	802	1080	1882
幼 兒	28169	27070	55239
保 育 滿 期 者	18468	14173	32641
一園ニツキ保姆比例	3.25	2.52	2.79
一園ニツキ幼兒比例	114.04	63.25	18.84
一保姆ニツキ幼兒比例	74.77	33.11	48.36

幼稚園ニ關スル法令抄録

〓 小學校令施行規則(明治三十三年八月二十一日文部省令第十四號)

第九章 幼稚園及小學校に類スル

各種學校

一九五條 幼稚園ハ滿三歳ヨリ尋常小學校ニ入學

スル迄ノ幼兒ヲ保育スルヲ以テ目的トス。

一九六條 幼兒ヲ保育スルニハ其心身ヲシテ健全

ニ發達セシメ善良ナル習慣ヲ得シメ以テ其ノ家庭教育ヲ補ハン事ヲ要ス。

幼兒ノ保育ハ其心身ノ發達ノ程度ニ副ハシムベク其會得シ難キ事項ヲ授ケ又ハ過度ノ業ヲ爲サシムル事ヲ得ズ。常ニ幼兒ノ心情及行儀ニ注意シテ之ヲ正シクセシメ又常ニ善良ナル事例ヲ示シテ之ニ倣ハシメン事ヲ努ムベシ。

一九七條 幼兒保育ノ項目ハ遊戲唱歌談話及手技トス。

(一九八條乃至二〇一條削除)

二〇二條 保育ノ時數ハ管理者又ハ設立者ニ於テ之ヲ定メ府縣知事ノ認可ヲ受クベシ。

二〇三條 幼稚園ニ園長ヲ置ク事ヲ得。

二〇四條ノ一 幼稚園ニ於テ幼兒ヲ保育スルモノヲ保姆トス。

保姆ハ女子ニシテ小學校ノ本科正教員又ハ準教員タルベキ資格ヲ有スル者又ハ府縣知事ノ免許ヲ得タルモノタルベシ。

二〇四條ノ二 保姆ノ免許ヲ得ルニハ檢定ニ合格スルコトヲ要ス。

前項ノ檢定ハ小學校教員檢定委員會ニ於テ之ヲ行フ。

檢定ニ關スル規程ハ府縣知事之ヲ定ム。

(二〇四、一一四、一一五、一一九、乃至一二一條ノ規定ハ保姆ノ檢定及免許ニ關シテ準用ス。)

二〇四條 左ノ各項ノ一ニ該當スルモノハ教員ノ檢定ヲ受クル事ヲ得ズ。

1、 禁錮以上ノ刑ニ處セラレタル者。

2、 (削除)

3、 破産若ハ家資分散ノ宣告ヲ受ケ復權セザルモノ又ハ身代限ノ處分ヲ受ケ債務ノ辨償ヲ終

ヘザル者

4、免許狀褫奪ノ處分ヲ受ケ三箇年ヲ經過セザルモノ

一四條 試驗檢定ヲ受ケタルモノニシテ其試驗ニ合格セザルモ某科目ニ關シ成績佳良ナルトキハ府縣知事ハ其科目ノ成績ニ關シ證明書ヲ授與スル事ヲ得。

前項ノ證明書ヲ受ケタルモノニシテ更ニ試驗ヲ出願スル時ハ其證明書ニ記載シタル科目ハ關ク。

一五條 府縣知事ハ檢定手数料ヲ徵收スル事ヲ得。

一九條 府縣知事ハ小學校教員免許狀登錄簿ヲ作り免許狀ヲ授與シタル者ノ氏名其他必要ナル事項ヲ記入スベシ。

二〇條 免許狀ヲ有スル者其氏名ヲ變更シ又ハ免許狀ヲ毀損亡失シタル時ハ其書換若クハ再渡ヲ府縣知事ニ出願スルコトヲ得。

前項ニ依リ免許狀ノ書換若クハ再渡ヲ出願スル者ハ手数料トシテ府縣知事ノ定メタル金額ヲ納ムベシ。

一一條 免許狀ヲ受ケタル者ノ氏名及免許狀ノ種類ハ府縣知事之ヲ公告ス。

二〇五條 幼稚園長及保母ノ採用解職懲戒處分業務停止ハ小學校教員ノ例ニ依ル。

市町村立幼稚園長及保母ノ俸給旅費其他ノ諸給費ニ關スル規程ハ府縣知事之ヲ定ム。

二〇六條 幼稚園ノ幼兒數ハ約百二十人以下トス。但シ特別ノ事情アル時ハ約二百人迄増ス事ヲ得。

二〇七條 保母一人ノ保育スル幼兒數ハ約四十人以下トス。

二〇八條 幼稚園ノ設備ハ左ノ各項ノ規定ニヨルベシ

一、建物ハ平家建トシ保育室遊戯室其他必要ナル諸室ヲ備フベシ。

二、保育室ノ大サハ幼兒五人ニ付一坪ヨリ小ナル事ヲ得ズ。
三、遊園ハ幼兒一人ニ付一坪ノ割合ヲ以テ設クル事ヲ常例トス。

四、恩物、繪畫、遊戯道具、樂器、黑板、机、腰掛、時計、寒暖計、暖房器、其他必要ナル器具ヲ備フベシ。

五、敷地、飲料水、及採光窓ニ關シテハ小學校ノ例ニ依ルベシ。

ほんとうの自由

某日、私は自由教育協會の講演會に参りました。そして、片山伸先生の自由と云ふ事についてのお話を、たゞ、うつとりしたそれこそ自由な自分勝手な氣持ちで聴きました。その席を去つて、その講演をくりかへして味つて見ました。「ノート」にも何にもとらなかつたので何處迄が先生自身の仰せになつた事で、何處を自分がつけくはへたのかわからなくなりました。しかし、とにかく私は私の心で先生のお話を味ひました。もとより一部分を。今その斷片をつつて見やうと思ひます。

空氣は全く自由に無^たで呼吸する事が出来る。誰にもとがめられず、誰とも争はずに吸ふ事が出来る、たゞ空氣を信じて安心して吸つてゐる。しかも一心不亂に吸つてゐる。一心不亂でなかつたら私達はすぐに窒息してしまふに違ひない。話をしてゐる時も、考へてゐる時も、實に私達は呼吸だけは一心不亂にしてゐる、意識もないで、争はないで、しかも一寸も休まずに、本當の自由はかういふものだ。いくら普通選舉運動が成功しても、勞働問題が解決しても、私達の心に、憎しみや、恨みや、人と人との繋り合ひのある間は私達の心は自由とは云はれない。本當の自由は、私達お互が信じ合つて、愛し合つて、丁度、空氣を無^たで呼吸してゐる様な、そんなのんびりとした心持になるといふ事にある。これは、法律や富や、地位が興へ得るものではない。自由と放縱とは大變に違ふ。例へば、酒をのむ人がどうしてもやめられないといふのは、それは酒のために束縛されてゐる證據でよわい人間である、本當の自由は自分の心が酒にとらはれずに、之をやめる事の出来る所にある。私達は、道で行きあふ人に「やあ、今日は、君も人類だね」といつて挨拶をして通りはしらない、所謂路傍の人で、お互が他を妨げずに往來してゐる。たゞ滑稽なものを見れば、無邪氣に笑ひもしやう。悲惨なものを見れば「悲惨だ」と呼びもしやう。此處に自由な所がある。眞の自由は、人間の本心からわき出した愛の泉なので、その泉があふれ出してそして、あたりを濡^{うる}して行く。憎みも、恨みも、きしり合ひも、その泉の中に皆、溶けてなくなつてしまふ、そしてお互が包擁^{うよう}し合つて、信じあつて、大きな息をついてのび〜と生きて行く、そこに、ほんとうの自由がある。私達の心の中には、人と争ふ氣分がある、人をゆるし得ない憎しみがわだかまる。そして私達は、私達の心をしぼる。信する事も愛する事も出来ないであせり、あえぐ。一心不亂にしてゐる呼吸の様に私達の心も信じ合つて愛し合つて、その中に一心不亂に生きて行く事が出来ればそれこそ眞に自由に相違ない。そのためには、いろ〜の法律も、權利の獲得も勿論大切な一助ともならう。しかしそれは何處迄も一助であつて、それが得られたからとて、すぐに、人の心が自由になるものぢやない。その助けを、うまく助手としてつかつて、自分達の心の憎しみや、れたみや、うらみが消えて行けばこそ初めて甲斐があるので、そうでなしに、そうした權利の獲得がかへつて、人の心をこらす様では、その人にとつてはその權利を得たためにます〜不自由になつた事になる。健康な人は、身體のある事をしらない。知らないからそれでは、その人の身體の諸機關は運轉してゐないかと云へばそうぢやない。一心不亂に實に一心不亂にはたらいてゐる。それが意識にのぼつて来る時こそは、かへつて其機關が一心不亂でなくなつた時である。

自由とは、ほんとうの自由とはかう云ふものである。らく〜とのびて、信じて生きて行く心の状態、しかも一心不亂に。私達は決して外的に自由を求める事は出来ない。(T子)

少年音楽家(二)

東京女高師教授 岡田美津

一、山の家

小家がたつた一軒遠く、山の半腹の明き地に立つてゐる。粗末な作りだが暖かさうである。家の背後うしろにある切立て岩は、北風を遮りながら日光を浴びて灰白色に峙たつたつてゐる。小家の前の明地は青々としただら／＼坂でそれが、少し先の處へゆくと、急に峻しい降りになつて、みすばらしい樅と松が生ひ茂つてゐる。小家から左へ細道をとつてゆくと、森林の奥の冷やりとしたところへ出る。右は山が急に開けて、民雄の大すきな景色を見せてゐる。見渡しのひろい谷、銀色の湖水、そこから一線リボンのやうに出てゐる河。その上方には、鼠に、緑に、紫に、山々が重り合つて、わけても高いのが、大空の中まで頭をつき込んでゐる。この小家から他所へ通ずる路らしいものはなく、たゞ森中に消える細道があるばかり。家屋もずつと下の谷に、河に沿うて白くポチ／＼見える他にこのあたりには一軒もない。

小家の中では、廣やかな爐が室の一方を占領してゐる。今六月なので爐には唯灰が白く残つてゐる。もつとも奥の臺所で豚肉豚肉の嗅がして熱火の上でヂュー／＼いふ音がきこえてゐる。室の道具は質素であるが、一寸世間並でない。寝棚が二つ、庵末ながら居心地のよささうな椅子が二三脚、テーブルが一つ、樂譜臺が二つ、函をそへたバイオリンが二つ、それに書籍とバラ／＼の樂譜紙がどこにもかしこにもちらかつてゐる。椅子ぶとんだの、窓掛だの小飾品だのと婦人くさいものがどこにも見えない。さうかといつて銃、生皮なまがは、鹿の角首

など、男子の技や力を物語つてゐるものもない。室の裝飾には、マドンナの立派な版畫と五六葉の寫眞、（それには、こんな山とはかけちがつた、花やかな社會で有名な人の、署名がしてある）と子供の手細工らしい松毬の花綵があるばかり。

臺所に充てた「差掛け小屋」からはバチ／＼いふ音が止んで、通ひ口へ、うつとりした黒眼の子が出て來て。

「父さんどー」呼んで見た。

返事がない。

「御父さん、そこにいらつしやるの」と、こんどはもつと逼るやうに呼んだ。

寢棚の一つから少し音がして、ものをいふけはひがした。男の子は音も立てず一跳びに、隅の寢棚へ、いそいでいつた。此子供は、ほつそりした身體つきの、首のあたりに短い捲毛を垂らした、紅い健康さうな頬をした少年で、女の子のかと思ふ程に、端細の指をしたその纖細な手をのばして。

「父さんいらつしやい僕がね、ペーコンも馬鈴薯もコーヒーも皆獨りでこしらへたの。早くよ。さめてしまひます」。

少年の確かりした手に助けられて、父は、そろ／＼と半身を起した。彼の頬も、少年のやうに紅かつたが——健康からの紅味ではない。その眼もや／＼狂ほしかつたが聲だけは低く優しく、懐かしげに。

「民雄か——あ、うちの民雄だな」。

「民雄ですとも、僕でなくてどうするもんか、さ／＼いらつしやい」と少年は笑つて父の手を引張つた。

父はよろ／＼と起き上つて、懸命に氣を張つて直立した。眼の狂ほしかつたのも、頬の上氣してゐたのももう直つてしまつた。そのかはり顔が、急に老人めいて、窶れて見えた。でも可なりしつかりした歩調で室を出て、小さな臺所へ行つた。

ペーコンは、半分黒焦になり、半分は透き通つて硬い寒天のやうだつた。薯は水ぼいし、コーヒーは微温でどろ／＼してゐた。ミルクまでが酸味があつた。

で民雄は困つたやうにちよつと笑つて。

「父さんのなさるやうにうまく出来なかつたんです」と申譯らしくいつて。

「御料理の合奏では、僕は調子外ればかりやつたんですね。かまどが、ところ／＼大變に熱かつたんでせう、ベーコンがところ／＼焦げちまつて。いもは水氣がなくなさ／＼になつてしまつて。でも、それはかまはなかつたの、僕水をあとから入れたから。牛乳をね、つひ日光に出しはなし／＼置いたから變な味ですね、だけどこの次には、僕うまくしますよどれもみんな」。

父は、含笑としたが、悲しさうに首を振つた。

「この次といふ事はないんだよ」。

「何故？如何してなの？もう僕にやらせないんですか、え、父さん」といふ民雄の聲は、眞に悲痛の聲であつた。

父は躊躇した。奥から言葉が突出さうなので、彼は唇を開いて息を吸込んだ。そして、やつぱり何も言はずに急に唇を閉ぢてしまつた。やがて、彼は無造作に次のやうにいつた。

「なあ、折角の御前の料理を、かうしてゐてはすまない。さ、そのベーコンを少し貰はう、父さんは食氣が出て來たやうだ」。

折角出て來たきまぐれの「食氣」も永居はしなかつたと見えて父は一向食べなかつた。そして民雄までがあまり食べないので澁面をしてゐた。彼は民雄があと片付をしてゐる間黙して居た。そして民雄と連立つて戸外へ出て、西向きに腰掛の置いてある邊まで歩いて行つた時もまだ、だまつてゐた。

民雄は、餘程、天氣でもわるい日でなければずつと下の谷にある銀の湖に別れを告げないで床に就いた事がないのである。

「父さん、今夜は金色——夕日ですつかり金色ですな——」

あゝ——綺麗だ」と民雄は自分の大切な湖に目を落して嬉しさうにいつた。

如何にも喜悅^{よろこび}しさの迸つた聲なので、それをきいた父は打たれでもしたやうに畏縮^{ひる}んだ。

「父さん、僕は弾^ひくんんだ。どうしても弾^ひくんんだ」といひ、民権は家へ跳り入つて頤^{あご}にバイオリンを押しあて、戻つて來た。

父は民権を眺めて聽き入つた。眺めるにつれ、聽き入るにつれ、父の顔には誇と恐怖、希望と落膽喜びと悲みとが互に勝を制しやうと闘つてゐた。

入日の前に立つて民権がバイオリンを弾くのは珍らしい事ではなかつた。心を動かす事があれば彼は常にバイオリンに訴へた。わななく絃を藉りて、舌でいへない情^{なまひ}を表はすのであつた。

谷の彼方の山々の鼠や緑は、今は一つ紫になつてしまつた。見上げる空は、一面金と紅の熔けた海であつて、その上に薄桃色の雲が小舟のやうに浮いてゐる。見下す谷は、島も林も暗緑でその中に、湖と河が金とうすもゝ色にうき出てゐて、さながら神仙の世界かと思はれた。

この景色がそのまゝ民権の曲となり、この美しさが民権の、空を仰いだ喜びに溢れた顔に現はれてゐた。桃色が薄れて鼠になり、バイオリンの餘韻が消えて沈黙に歸した時、父は口を開いた。強ひて平氣を装はうとしたその聲は、ほとんど冷酷にひびいた。

「民権、どうく時節が來たぞ。之を止さねばならなくなつた」。

民権は不思議さうに父を見た。顔はまだほんのりと冴えて。

「何を止めるの」。

「之を——こんな事をみんな」。

「だつて父さんどういふわけなの？ こゝは家でせう？」。

父は大儀さうに點頭した。

「さうだ、今までは家だつた。けれどもな、御前だつて始終かうしてこゝに居られるとは思はなかつたらう」。

民権は小聲に笑つて、また遠い空へ目を放つてうつつとりと、

「居られないわけはないでせう。こゝよりもいゝ地とこなんかありやしない、僕はこゝが好き」。

父は苦しい息をして身を動かした。腹部の痛が烈しくて身體の位置をどうかへても樂になれなかつた。彼は病氣なのであつた。彼はそれを承知してゐた。同時に、彼は民雄が疾病や苦痛や死の意味を知らないで、ただ言語ことばとして軽く何氣なく見すごして來たのを承知してゐる。彼は自分の教育法——の一部が誤つて居りはしなかつたかと始めて考へた。

六年の間、彼は民雄を自分一人で護り育てゝ來た。六年の間、子供は、彼の與へる食を喰み、衣類を著、書物を學んだのである。六年の間、彼は我子の爲に考へ計劃し呼吸し動作も生きて來たのである。たゞ時折森を抜けて、山腹の町へ、衣食の料を調へに行くのが氣晴らしであつた。之は皆彼が態まゝと計らつた事なので、彼は善と美のみが民雄の幼な心に入るやうにと考へたのである。悪、不幸、死は民雄の心には意味がないやうにといふ譯ではなく、唯明白はつきりと解つてくれないやうにとの積りであつた。善と美とが心に一杯漲つて、その他のものゝ入る餘地がないやうにと願つたのである。そして今日まで彼は成功して來たのである。實に不思議なほど成功したのであるがしかし現在自分が病氣に罹り、もしやと先が案じられて見ると自分の仕組が賢明ではなかつたかと始めて疑はれ出したのである。

彼は民雄の恍惚とした顔を眺めながら、此の子が林の中で始めて死んだ栗鼠を見た時の不思議がりやうを思ひ出した。子供は、その時六歳だつた。

「父さん！ この栗鼠寝てゐますよ。ちつとも目を覺さない」と云つてそれから撫でゝみて「あれ、冷たい！——大變冷たくなつてゐる」。

その時父は急いで子供を連れて、その場を去つて、その間を曖昧こまかてしまつたのだが、子供は平氣であつた。翌日民雄はその話を持出した。目を大きく開いて、心配さうな風に。

「父さんどんなになるの、死ぬつていふのは」。

「何を言つてゐるんだ」。

「牛乳配りの小僧が——今朝あの栗鼠を持つてゐたの。眠てゐるンぢやないッて。死んだンだつていひましたよ。」

「それはな、栗鼠が——よいか——毛の下に入つて居るほんとの栗鼠が他所へいつてしまつたンだ。」

「どこへ？」

「遠いところへ。」

「また歸つて来るの？」

「いえ。」

「栗鼠は行きたがつたンですか。」

「まあさうだらうな。」

「それでも毛衣を置いていつたンですね。——いらぬからなの？」

「ウン。いるなら持つてゆくさ。」

民雄は之を聞いて黙つて居た。それから五六日、妙に黙りこんで居る。ある朝、父に連れられて林にいつてゐた時、彼は嬉しさうに大聲を擧げた。氷が張り詰めてゐた小河の傍に、丁度彼は立つて居て、小さな黒い孔から水が忽忙しく流れ出すのを眺めて居たのだが。

「父さん、父さん、僕解つた。あの死ぬッていふ事が。」

「どうして。」

「小河の水みたやうなのね。水は遠い所へいつてそして歸つて來ない。冷たい氷の上衣を置いて行きます。あの栗鼠みたやうに。上衣がいらぬンだ。なしで行かれるンだ。ね、父さん。アラ、唱つてゐる、流れながら唱つてゐる。行きたいンですね。」

「そうだな。」

と言つて父は、民雄が、自分でその不可思議にしかも満足の出来る説明をつけたので安心したのである。

その後民雄は書物の中で「死」といふ事にまた出遇つたこんどは人間の死であつた。彼は吃驚りした眼をして父を視上げた。

「人が、父さんや僕のやうなほんどの人が、死ぬの？ 遠いところへ行くのですか？」

「あゝ時が来るよな。立派な良い王様が治めていらつしやるよかいふ遠い國へ行くんだ」。

父はそう言ひながら慄へて結果如何にと待つて居た。併し、民雄は嬉しさうに微笑して。

「小河のやうに唱ひながら行くンですね。僕小河の歌を聴きましたもの」。

それでその問題は終つてしまつた。民雄はいま十歳になつてゐるが、まだ彼には死は恐ろしいものと響かないのである。この點を父はうれいとも思ひ、この點故に恐れを抱いた。

「民雄。父さんが今言ふ事を御さう」

少年は長い息を一つして父に對つて。

「ハイ」といつた。

「こゝを出てゆくのだよ。世の中では、男も女も子供も御前の來るのを待つてゐる。御前は美しい仕事をしなければならぬのだ。山の中では人の仕事が出来ないから」。

「何故なの。僕こゝが好き。僕、始からこゝにゐるンですもの」。

「始からではない。六年ゐたんだ。こゝへ連れて來た時には御前は、四歳だつた。覺えてゐないだらうな」。

民雄は首を振つた。空に注げてゐた彼の眼はまた恍惚となつて。

「僕はあのあすこの雲の船に乗つてゆけるなら——行つてもよいけれど」。

と小聲でいつた。

父は歎息して首を振つた。

「雲の船では行かれない。歩いて行かなくつては——途中までは——もうぢきに行かなくてはならない——ぢきにだ」。とせか／＼言ひ足した。「御前を連れ戻さなくては——待つてゐる人のところへ。俺にもしもの

事が……。」

よろ／＼と彼は立つて、そして眞直まっすぐに歩かうとしたが、足が慄へて顛顛このかみのあたりがピン／＼動いた。彼は弱つてゐる自分に驚いた。恐れのために氣が荒々しくなつたか傍の民雄に對つて。

「行かなければならない——明日だ。」
と鋭く言ひ放つた。

「ほんど？父さん。」

「どうだ。さ御出で。」

父は盲滅法に躓き歩いて、どうにかかうにか家の入口まで來た。あとで民雄はまだちつと眺め盡してゐたが、やがて飛び上るやうに立つて、父のあとを追かけた。

○東京女高師保育實習科卒業式

本年は修業年限が一ヶ年になりましたので同科の卒業式は去る三月二十七日午前九時三十分より東京女子高等師範學校大講堂に於て本校及附屬高等女學校と共に盛大に行はれました。本年度卒業者は十六名。

三月二十五日には保育實習科生一同は長くも宮中拜觀の光榮を擔ひました。

日本幼稚園協會役員

會長

湯原元一

主幹

倉橋惣三

幹事 (イロハ順)

井村くに

池田トヨ (會計) 坂内ミツ (庶務) 和田實 和田くら

梶原はな

土川五郎 奈良山梅 向井琴柱 小向きみ

小山はな

小高つや (編輯) 及川ふみ

乙竹岩造

吉田熊次 田中ふさ 野口幽香 安井哲

榎山榮次

藤井利譽 下田次郎 日田權一

折井彌留枝

大和田りよう 坪内きく 宇式かへん 久住モト

坂井ふで

司馬のぶ 望月く に 膳たけ

加盟保育會

- 東京市保育會
- 京都保育會
- 大阪市保育會
- 神戸市保育會
- 静岡縣保育會
- 名古屋保育會
- 香川縣保育會
- 福島縣保育會
- 吉備保育會

親の爲

四月號要目

新思想に對する父母の自覺	湯原元一	冊一分年一
一、二歳兒童の衛生	三田谷啓	冊一分年一
兒童の想像作用	久保良英	定價
米かパンか	巖谷小波	定價
泣く子に負ける母親	沼田笠峯	定價
幼稚園で困る子供と其取扱方	各地幼稚園	定價
榮養問答	一戸伊勢子	定價
幼兒保育の實際案	久保良英	定價
海外教育・兒童相談・入選育兒談發表其他		定價

發行所 東京市芝區白金三光町五三七番地 兒童研究所

振替東京三六二二九番

明治三十四年一月二十八日第三種郵便物認可(毎月一回十五日發行)

幼 兒 教 育 第 二 十 卷 第 四 號

大正九年四月十五日印刷
大正九年四月十五日發行

印刷所

合資會社 杏 林 舍

杏 林 舍